

Title	Marga Institute, The informal sector of Colombo city
Sub Title	
Author	池田, 年穂(Ikeda, Toshiho)
Publisher	三田史学会
Publication year	1983
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.52, No.3/4 (1983. 1) ,p.124(464)- 132(472)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19830100-0124

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

料とは言えない。しかし、サモス反乱前頃から三国を特別視しかつそうするのが利益になるとアテーナイが考え始めた節はある。ではなぜそうしたか。血縁の誼とかペルシア戦争の際の援助の返礼とかではない。そうすることが自国の利益になると考えたからにすぎない。すなわち、これら諸国の保持している艦隊ならびに基地やドック等が確保出来たからである。特にサモス反乱後、アテーナイはこの重要性に気付き、キオス、レスボスとの友好に努めた。しかし、これらの国々が民主制を確立するようにと固執することはなかった。

他方、アテーナイに対する三国の思いはどうであったか。史料不足で確答しにくいのが、三国とも自己の独立自治が実は外観のみで偽善でしかないことを知りつつもその地位に甘んじていたのみか、各国それぞれの思惑からアテーナイに追従さえしていたのである。すなわち、アテーナイへの恐怖、共通の敵に対して協調する精神の欠如、他国への無関心等が絡み合って三国共々現状に甘んじた。従って、これら三国は、自己の利益が危められたと思えば(レスボス、サモス)、あるいはアテーナイは早晚敗北に至ると確信すれば(キオス)アテーナイと対決したのである。離反にあたり、同盟国内外の援助を求めたのは、自由の大義のためではなく自己の危険をより減少させるためでしかなかった。

以上が本書の要旨である。

確に、ディオドロスは皮肉にも利益一筋の発言をしている。しかし、彼の発言の裏には極めて個人的な様々の思い、時には矛盾した思いが込められているのではなからうか。同じく、アテーナ

イと三国の関係において利害の思惑が重要な比重を占めていた事実は否めない。しかし、それが具体的に何んであったのかの分析は、史料の不足もあって本書では充分になされていないのではないかと印象を評者は得た。しかし、こうした感想も本書の重要性を損うものではあるまい。

(82. VIII. 27)

Marga Institute: The Informal Sector
of Colombo City; 1979 (Marga Edition): 155pp. Colombo

池田年穂

I 本書の性格

第三世界のインフォーマル・セクターについての研究は、近年とみに盛んになってきている。本書は、ILOの「世界雇用プログラム」の一環として、コロンボのマルガ研究所がILOから委嘱をうけ、調査・報告したものである。^(注1)

インフォーマル・セクターに含まれる事業を簡単に定義すると、以下のようなになる。

- (i) 使用人が五人以下である。
- (ii) 雇用が、インフォーマルな性格を帯びている。(実際には、家族による事業、自己のみによる事業が、その殆んどを占める)

- (iii) 建物・設備への投資が少なく、労働集約的である。
- (iv) マネージメントが単純で、文書による部分が少ない。
- (v) ノウハウや技能が、公的な教育の場以外で得られることが多い。

こうしたインフォーマル・セクターについては、従来は、セクター内部の二重構造に目を向け、既得権を持つ事業者が、新規参入者の労働や製品やサービスに対し、僅かな代価しか支払わず、劣悪な労働条件を強いているといった *sweat shop* 的な観方が主流であった。インフォーマル・セクターの雇用創出面を強調する見解が提出されたのは、ILOがケニヤに派遣したミッションによってであり、比較的近年のことである。

我が国で、インフォーマル・セクターの典型とみなされてきたのは、ジャカルタを始めとする第三世界アジアの諸都市のそれであった。^(注2) 雇用機会の増大を伴わぬまま、周辺農村部から都市部へと人口が流入し、スラムを形成する。流入人口は、インフォーマル・セクターに参入し、フォーマル・セクターと、インフォーマル・セクター内の既得権を有する者により、二重に搾取をうける。フォーマル・セクターの労働者と、インフォーマル・セクターの労働者の、賃金を始めとする労働条件や生活条件の格差は、年々深まっていく。こういったイメージは、確かに、多くのアジアの都市に、程度の差はあれあてはまるものであったし、我が国に紹介される図書の多くが、そのイメージを強化する内容を持っていた。

コロンボのインフォーマル・セクターは、上述のような他のア

ジア諸都市のインフォーマル・セクターとは、明らかに異質である。本書は、コロンボのインフォーマル・セクターの量的分析に主眼がおかれ、質的な分析には望蜀の念を禁じ得ないが、スリランカの都市化とインフォーマル・セクターについての類書が稀少であるため、貴重なものとなっている。

本書の構成は、五章よりなる。第二章の、「コロンボのインフォーマル・セクターの量的分析」は、第三章、第四章で、それぞれ「事業」、「従業者」の観点から、いくらかのケース・スタディも混え、補足・説明されている。第五章では、「コロンボのインフォーマル・セクターの管理と発展」について、「政策立案」の視点を中心に、現状と展望が述べられている。そして、第一章では、コロンボの都市史が記されているが、この章は、とりわけコロンボのインフォーマル・セクターの「特異性」について考察する際に、その背景説明として重要なものとなっている。

II コロンボのインフォーマル・セクターの概要

コロンボの総労働人口一七八、五九四人中、インフォーマル・セクター人口は三四、三九〇人で、その占める割合はわずか一九・二五パーセントと、他のアジア諸都市に比べて、かなり低い数字を示している。⁽¹⁾ 周辺農村部からコロンボへの急激な人口流入が見られなかったためと言えるが、このことは、コロンボのインフォーマル・セクター従業者三四、三九〇人中、コロンボに元々居住していた者が一九、七八〇人と、五七・五一パーセントの高

率を示していること⁽²⁾によっても、裏付けられる。

インフォーマル・セクターの業種は、(a)商業、(b)製造加工、(c)サーヴィス業、(d)輸送、(e)農耕漁撈、(f)建設と多岐にわたっている。その中では、商業のカテゴリーが最も大きく、事業数で五六・六パーセント、従業者数で五二・〇九パーセントを占めている。インフォーマル・セクターにおいては、事業数と従業者数の比率は、ほぼ一致するので、事業数の比率のみを記していけば、第二位のサーヴィス業が二一・六八パーセント、第三位の製造加工業が一・二・三五パーセント、以下、輸送、農耕漁撈、建設と続いている⁽³⁾。

コロンボのインフォーマル・セクターの営業規模は、一人のみのものが、八五・二九パーセントの高率に達する⁽⁴⁾。また、個人所有の事業が、九二・六四パーセントにのぼる⁽⁵⁾。資金源においても、公的な金融は六・二パーセントしかなく、自己のみの資金が七〇・三パーセントを占める⁽⁶⁾。基本的に、シングル・オーナー・オペレーターによる事業としての色彩が強い。

営業年数をみると、一〇年以上のものが四二・一八パーセント、五年〜一〇年のものを含めると、六二・六九パーセントに達し、かなりの程度恒常的な事業となっている。また、一年以下が九・七五パーセントであるのに、一年〜二年が七・五二パーセント、二年〜五年が一〇・一八パーセントとなっており⁽⁷⁾、新規参入した従業者で、一〜二年の間に脱落する者は多いが、その後は永續性が高まり、インフォーマル・セクターの内部でも、業種間の移動性が少ないことが分る。これは、サーキュラー・マイグレイ

ションが多く、事業あるいは職種としての永續性が乏しい、他のアジア諸都市のインフォーマル・セクターとは、かなり異なる点である。

営業の場所については、移動型が三四・五パーセントを占める。これは、舗道で店開きしたり、手押車・牛車・自転車・かごなどを用いたり、行商してまわったりする営業形態である。専有の場所を持つもの六五・五パーセントの中でも、恒常的な建物を構えている事業は、私有地に建てられたもの一四・四四パーセント、公有地に建てられたもの四・九四パーセントを併せても、一九・三八パーセントに過ぎない⁽⁸⁾。概して、建物・設備への投資は、最小限にとどめられている。

事業の所在地は、コロンボの商業地区に三二・七四パーセント、住居地区のバザールに四〇・五八パーセント、住居地区に二一・四八パーセントと拡散している⁽⁹⁾。この数字は、インフォーマル・セクターの顧客層もまた、拡散しているという事実と符合する。商業のカテゴリーを例にとれば、顧客の八〇パーセントが、上流(一三・一パーセント)・中流(三二・四二パーセント)・下層(三四・四八パーセント)にわたる家庭であり、残り二〇パーセントが、他のインフォーマル・セクター(九・五六パーセント)も含めた何らかの事業や組織である。製造加工のカテゴリーなどでは、家庭以外の顧客が、四二・七六パーセントにも達している⁽¹⁰⁾。

コロンボのインフォーマル・セクターの事業のそれぞれのカテゴリーについては、第三章に詳しく述べられている。あらゆるカ

テゴリーの中で、最もインフォーマル・セクターに向いているとみられるものは、無論最も高い比率を示す商業であるが、商業全体の七〇パーセントを占める野菜(三四パーセント)・果物(一九パーセント)・魚(一七パーセント)の販売は、フォーマル・セクターを寄せつけない業種である。これらの販売がインフォーマル・セクターに向いている理由としては、供給者から消費者までをつなぐ古くからのネットワークが存在すること、都市型の生活(主婦が職場に進出する度合いが大きく、女中の数は少ないが、冷蔵庫を備えている)が普及していないため、毎日少量の品物を届ける方が好まれることがあげられる。全階層を顧客にして、品質・鮮度に応じて商品を上流から下の階層へと、おろしていくこともできる。この分野では、間接費の高くつくフォーマル・セクターは、それを補うためにも大規模・高品質の販売を強いられるため、インフォーマル・セクターに比べて、不利である。しかし、商業以外のカテゴリーのほとんどにおいて、インフォーマル・セクターとフォーマル・セクターとの関係は微妙であり、時には緊張した状態にある。

Ⅲ コロンボのインフォーマル・セクターの従業者

インフォーマル・セクターに参入するには、既存の事業に雇用されるか、自分で始めるかのどちらかである。第三章には、参入の実例として、四人の従業者の経歴があげられている。

未熟練労働の場合には、プランテーション労働をやめたタミー

ルが、都市において「最初の仕事」にするといわれるワッティ(かご)を使った品物の搬送を始め、商業や飲食業の手伝いなどが、参入しやすい職種となる。

熟練労働の場合には、見習い期間が必要となる。それぞれの業種に不可欠な、素質や信頼性、体力などに加えて、インフォーマル・セクターで実際に営業している者との間に、何らかの関係性が結ばれていなければならない。始めから独立してやっていく場合には、セクター内部のヒエラルヒーの最下位に入り、既得権を持つ者たちとの軋轢を避ける必要がある。いかなる場合にせよ、参入の際には、エスニシティと出身地との二つが、重要な要素となってくる。

インフォーマル・セクターの事業は、成功しても、セクター内部で成層化(例えば、行商↓舗道での販売↓建物を構えての営業)することが多く、フォーマル・セクター化は妨げられる。その理由としては、内部留保が垂直化されずに、個人的な社会的地位の上昇(子女の教育、個人家屋への投資など)に向けられてしまふこと、事業が拡大するにつれ、マネージメントが文書などを媒介とする必要がでてくるなどフォーマル・セクター化し、インフォーマル・セクターの事業者の手に余ることなどがあげられる。とりわけ、インフォーマル・セクターにおけるパトロンライアント的な雇用関係が、フォーマル・セクターでは契約関係の要素が強くなるので、事業のフォーマル・セクター化が難しくなる。

インフォーマル・セクターの被雇用者の労働条件は、決して恵

まれたものではない。全分野の事業の営業日数が、週七日のもの四五・七八パーセント、六日のもの二四・四七パーセント⁽¹¹⁾という数字からも、それがうかがえるし、商業を例にとれば、定まった労働時間を持たぬもの九三パーセント、食事または食費を支給せぬもの九二パーセント、日曜または祝日に必ずしも休まぬもの八六パーセント⁽¹²⁾といった高い比率にも、それが示されている。ただし、オーナーも同じように働いていること、個人的な様々のケアがあること、フォーマルな教育のない人間にも機会を与えることなど、必ずしも搾取的ということできない側面も多い。セクターの内部では、資本系列の点でも、搾取的な関係は存在するが(例えば、手押車の運搬人と、手押車のオーナーとの関係)、関係性全体が一つの連鎖となつていたので、資本の要素だけを取り除くことは難しい。

コロンボの人口の五〇・六パーセントがシンハリであり、二四・五パーセントがセイロン・タミルとインド・タミルであり、一八・三パーセントがセイロン・ムーアである。インフォーマル・セクターのエスニック・グループ別比率は、シンハリ、タミール、ムーアがそれぞれ、六五パーセント、二〇パーセント、一五パーセントであり、⁽¹³⁾あらゆるエスニック・グループが、インフォーマル・セクターに参入できることを示している。ただし、各エスニック・グループが、特定の職種をほぼ専有化する傾向は存在する(例えば、野菜・果物・魚の販売はシンハリ、輸送・屑物屋・靴屋はタミールなど)。

次に、フォーマル・セクターの従業者と、インフォーマル・セ

クターの従業者との比較であるが、これは第四章に詳述されている。アジアの多くの都市においては、フォーマル・セクターとインフォーマル・セクターとの従業者間の格差は、歴然としていたことが普通であるが、コロンボに関しては、その傾向を見出すことが難しい。

まず、年齢別・性別に、両セクターの従業者分布を比べると、女子の若年層(一〇歳〜三九歳)では、フォーマル・セクターの方でセクター内部で占める比率が高く、それ以上の年齢層ではインフォーマル・セクターの方がセクター内部で占める比率が逆に高くなるという一点を除けば、驚く程似通った分布を示している⁽¹⁴⁾。

極めて重要な教育の面をみると、インフォーマル・セクター従業者の公的教育の水準は、学業年数〇年〜四年、五年〜九年、十年以上が、それぞれ三〇パーセント、四〇パーセント、一二パーセントであり、都市従業者全体の、それぞれ三七・六パーセント、三七・八パーセント、一二・七パーセントといった比率と比べても、さして遜色がない。インフォーマル・セクターで公的教育をうけていない者の比率は一八パーセントであるが、その内文盲は一〇パーセントに過ぎない。⁽¹⁵⁾ただし、大学教育のレヴェルで考えれば、インフォーマル・セクターには人材が回っていない。これは勿論、大卒人口が、ホワイト・カラーや知的専門職をめざすためである。

従業者の収入分布と世帯規模の面からみても、フォーマル・セクターとインフォーマル・セクターとの間に、明瞭な差異を認め

ることは難しい。インフォーマル・セクター従業者の世帯の構成員の四〇・四七パーセントがフォーマル・セクターで働いているという数字が示すように、世帯の構成員が双方に雇用されているケースが多いことが、区分けを難しくしているといった事情もある。概して、世帯規模は、どちらのセクターにおいても、四人〜七人の間が多い。

収入の分布でも、インフォーマル・セクターを、国全体の収入分布の下部におくことはできない。インフォーマル・セクター内部でも、収入の差異は甚しく、一日の収入が〇〜九ルピーの者が、全体の二四・三六パーセントを占めるが、これは世帯の労働人口がこの一人のみで、他に扶養家族三人以上を抱えていると仮定すると、貧困線以上かそれ以下の生活と言ってよい。フォーマル・セクターの従業者には、この層はほとんどいない。それ以外では、インフォーマル・セクター従業者の収入分布は、一日一九ルピー以下が、五一・一二パーセントと過半に達するといえ、一日一〇〇ルピー以上の収入を有する者も一〇・〇八パーセントを占めるといったように、フォーマル・セクター従業者に劣らぬ幅広い分布を示している。

また、居住のパターンも、収入の多寡により決定されるのであり、インフォーマル・セクター、フォーマル・セクターの別によるものではない。インフォーマル・セクターに固有の生活様式といったものも存在しない。

結論として述べると、インフォーマル・セクターは、極く少ない資本で相応の収入を保証する三五、〇〇〇の雇用機会をコロン

ボにもたらしている。セクターの内部には、経済的機会が開けており、貧困線上、あるいはそれ以下の生活レベルの人間が、一時的に糊口をしのぐ場ときめつけることはできない。インフォーマル・セクターは、新規参入者を迎えるにあたり、無制限な雇用はしない上、独立して事業を始める者にも、既成のノームに従うように圧力をかける。つまり、インフォーマル・セクター自体に、流入を規制するメカニズムが働いていると言える。

インフォーマル・セクターは、そのように、かなり安定した労働市場とは言え、三次産業に偏り、製造業では限られた寄与しかしていない。また、インフォーマル・セクター従業者のフォーマル・セクターへの移行も、とりわけて若年失業者の多い現状からみて、考慮の外である。その上、インフォーマル・セクター内部での事業の発展には、自ずと限界がみられるのも、既にみてきた通りである。

IV コロンボのインフォーマル・セクターの 特異性とその背景

コロンボのインフォーマル・セクターの特異性については、既に随所でふれてきたが、その背景にあるのは、コロンボが地方から都市への人口流入の強い圧力をうけなかったという事実である。このことは、スリ・ランカ全体で、労働市場への新規参入者の間での失業率が異常に高いことを考慮した場合、驚嘆に値する。

コロンボ市の人口は、第二次大戦後、一九四六年、一九五三年、

一九六三年、一九七一年が、それぞれ三六二、〇七四人、四二五、八八一人、五一、六三九人、五六二、一六〇人と着実に増加してきたが、この増加率は、実はスリ・ランカの人口増加率を下回っているのである。ただし、増加率が抑えられた背景には、いわゆる「ドーナツ化現象」があったのは確かである。エリート層は市の郊外に移り住む傾向があるし、他方コロンボ市には、不法占拠者によるスラムも、戦後形成されている。

スリ・ランカ全体の都市人口の比率をみた場合にも、一九四六年に二〇・五パーセントであったものが、一九七一年に二二・一パーセントと、僅かな増加率しか示していない。ちなみに、スリ・ランカの都市人口のほぼ五〇パーセントは、首都圏と呼ぶべきコロンボ地区 (Colombo District) に居住している。

スリ・ランカ全体の都市人口増加率の低い理由は、概ね、コロンボ市の人口増加率の低い理由と重なりあうが、大きな理由として、四つ程あげることができる。第一には、政府が、人口稠密なウェット・ゾーンから、人口密度の低いドライ・ゾーンへの移住を奨励したことである。第二には、政府が一連の社会福祉政策を実施したため、農村部の生活水準をかなりな程度向上させ得たことである。第三には、島自体が小さく、道路網が発達しているために、恒久的な移住をせずとも、コロンボを始めとする都市部と、経済的にも文化的にもつながりを持つことが容易なためである。そして第四に、大規模な産業振興は政府主導のものが多く、政府は、工場設置に際して地方分散を図ってきたということがあげられる。

また、スリ・ランカでは、インフォーマル・セクターの中でも最下層の職種である、草むしりや靴磨き、ポーターなどは、他のアジア諸都市と異なり、ほとんどみかけられない。しばしば指摘されるが、スリ・ランカの家族制度が、失業者を家族の中に包摂する機能を果していることが、こうした一時的な職種を生み出さぬ理由であると考えられる。

V 本書に対する批判

本書の中で用いているデータは、インフォーマル・セクターについては、主として、一九七六年～一九七七年のマルガ研究所の都市研究部会 (Urban Studies Unit of the Margate Institute) の調査によって得られたものである。^(注) スリ・ランカおよびコロンボの趨勢を知るための数字は、センサスの結果を用いる都合上、一九七一年のものも多い。コロンボの都市史を説明するためのデータは、遡って一八七一年からのものが使われている。

本書に対する批判としては、以下の二点をあげることができる。第一には、ケース・スタディが極めて少ないことである。インフォーマル・セクターの性格上、よりヴィヴィッドな理解を得るためには、何よりも従業者に対する関心が優先されなければならない。パースナル・ヒストリーの蒐集は、インフォーマル・セクターを、コロンボ社会、スリ・ランカ社会の中に位置づけるためにも、有効なアプローチの一つであると言えるし、次に述べる第二の批判に答える方法でもあると思える。

第二の批判として、量的分析に力を注いだため、質的分析にお

いて、しばしば見逃した部分がうかがえることである。例として、公的教育の問題をあげてみよう。公的教育は、雇用の質の問題と密接に関係する極めて重要なファクターである。本書では、フォーマル・セクターとインフォーマル・セクターとの間で、大卒レベルを除けば、顕著な差異はみられないというデータが提出されている。このデータ自体は、コロンボのインフォーマル・セクターの特異性を物語るものとして、重要であるが、フォーマル・セクターへの参入には、単に学業年限のみでは計ることのできない要素が存在することにはふれていない。かつてほぼ一世紀半にわたり英領であったスリ・ランカには、旧宗主国イギリスのパブリック・スクール類示の学校が存在し、その人的ネット・ワークは、現在でも社会的に大きな力を發揮しているのである。また、インフォーマル・セクターへの参入には、エスニシティと出身地とが問題であるとして、慎重に「カースト」にふれることを避けているが、量的分析の対象にしにくいファクターであるだけに、通時的な観点も加えて、現況に言及して欲しかった感はない。

いずれにせよ、コロンボのインフォーマル・セクターを対象とした本書は、同時に、スリ・ランカ社会の現状と現代史とを知るための恰好の手引きともなっている。

(注1) 他に、ジャカルタ(インドネシア)、マニラ(フィリピン)、カルカタ(インド)、ラゴス、カノ、オニッシャ(ナイジェリア)、クマシ(ガーナ)、フリータウン(シエラ・レオネ)、

ダカール(セネガル)、ボゴタ(コロンビア)、カンピナス・サン・パウロ(ブラジル)、コルドバ(アルゼンチン)の各都市のインフォーマル・セクターについての調査が、本書出版時点で実施中、ないしは完了していた。

(注2) インドネシアのインフォーマル・セクターについては、以下の論文を参照した。

Graeme Hugo: Circular Migration おぼろ Lea Jellinek: The Pondok of Jakarta ジャカルタ Bulletin of Indonesian Economic Studies, vol XIII, no.3, 1977 所収。
Lea Jellinek, Chris Manning, Gavin Jones: The Life of the Poor in Indonesian Cities; 1979. Monash U.P.: 42 pp. Clayton

(注3) スリ・ランカの識者とのディスカッションによれば、スリ・ランカでは、統計の集計技術は、イギリス統治以来の伝統をうけつぎ、比較的高度なものであるが、インフォーマントの理解がそれに伴わない憾みがある。事業の資金源などに関しては、微妙な問題であるため、殊更曖昧な表現をとるケースが多いことは、十分に予想される。また、例えば収入分布の点で、一日当り収入一〇〇ルピー以上の者が九・四三パーセント、五〇〇ルピー以上の者さえ一・五パーセントいるという数字が提出されているのは、フォーマル・セクターの高収入の職種と比べても、余りに高率すぎるように思えるとのことであった。

文中の括弧内の小数字(1)~(18)は、それぞれ、本書の以下の表からデータを得たことを示す。

1 表六 2 表二九 3 表六 4 表九 5 表一一
6 表一三 7 表一〇 8 表一二 9 表一五 10 表一六

11	表一八	12	表一九	13	表二一	14	表二三	15	表二四
16	表二六	17	表一四	18	表一				

本文中、ドライ・ゾーン、ウェット・ゾーンの別、セイロン・タミールとインド・タミールの差異などについては、拙稿「セイロンにおけるコーヒー・プランテーション労働力の調達をめぐる諸問題」『史学』第五一卷三号を参照していただきたい。

貴重な図書および雑誌を快く貸与された、兵庫教育大学・戸谷修氏（スリ・ランカ関係）、金城学院大学・山本郁郎氏（インドネシア関係）に、謝意を表します。